

鹿児島県 有機農業情報

No. 9 H25.1

発行：農業開発総合センター
〒899-3401

南さつま市金峰町大野2200

TEL 099-245-1118

FAX 099-245-1116

「有機農業現地研修会について」 (食の安全推進課 099-286-2891)

県では、平成20年度から年2回、有機農業現地研修会を開催し、農業者相互の技術交流や有機農業の理解促進に取り組んでいます。本年度は、8月6日に出水市において第1回有機農業現地研修会を開催し、生産者や農業団体、市町村、県等の関係者が参加しましたので紹介します。

なお、本研修会はNPO法人鹿児島県有機農業協会に委託して実施しています。

1 澤田農園の有機農業の取組 [澤田農園]

- (1) 水稻の有機農業に取り組み、有機JASの認証は約3ha、うち2haは合鴨農法を行っています。
- (2) 有機農業に転換してから現在で3代目となり、家族で役割を分担して栽培に取り組んでいます。
- (3) 株間の設定を広くすることで通風や採光条件が改善でき病害虫の発生が抑制され、また、代かきを雑草が繁茂した状態で行うと、初期の雑草発生が抑制されます。

* 澤田農園は、有機農業のPRアンテナほ場として設置しており、県ホームページに有機農業の取組み等の紹介資料を掲載しています。

県ホームページ：

ホーム>産業・労働>食・農業>農業技術>環境と調和した農業>有機農業>有機農業アンテナほ場について



2 米の病害虫と生物多様性調査結果 [農総C生産環境部]

(1) 近年のイネウンカ類

ア 平成17年度以降ウンカの多発が問題

イ ウンカの飛来時期と種類、その被害について説明

(2) 九州の早期水稻栽培地域における指標生物の選抜

環境保全型農業の指標となる生物の候補は、調査結果からイモコモリグモ、ニホンアカガエル等。



8月6日研修会の様子

本年度は第2回目の有機農業現地研修会を、平成25年2月頃に開催する予定です。開催内容の詳細は、決定し次第、県ホームページ及びNPO法人鹿児島県有機農業協会ホームページにて案内します。皆様の参加をお待ちしています。

有機農業で活用できる試験成績等の紹介

「秋冬まきホウレンソウの有機栽培に適する品種‘スパイダー’」

(農業開発総合センター園芸作物部 099-245-1125)

農業開発総合センターでは、秋冬まきホウレンソウの有機栽培に適応性の高い品種の選定と栽培法の試験を行っています。今回、2年間の結果から、秋冬まき作型において収量性に優れ、徒長しにくい‘スパイダー’について紹介します。

1 生育

‘スパイダー’は、県内の秋冬まき作型で栽培事例が比較的多い‘ソロモン’に比べて、徒長しにくく、は種後45~53日の可販株率(草丈25~40cmの株数/調査株数)は90%程度と高い傾向であることから、収穫計画を立てやすい品種として有望と考えられます。

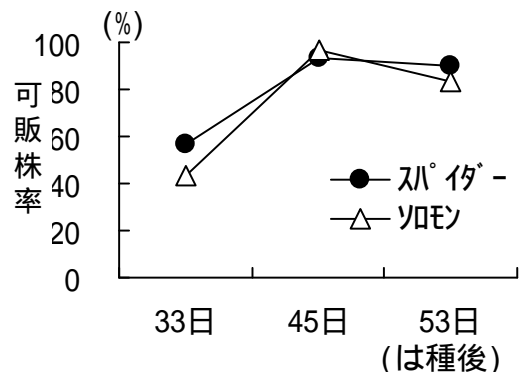


図1 規格内株率

耕種概要は図2 注釈どおり

2 収量

南さつま市で栽培した‘スパイダー’のは種後33~53日(平成23年11月9~29日)の可販収量は51~173kg/aで、‘ソロモン’(37~160kg/a)に比べて多い傾向でした。また、始良市(は種日:平成23年11月30日,収穫期:平成24年2月9~26日)で栽培した‘スパイダー’の可販収量は112kg/aで、‘ソロモン’(75kg/a)に比べて49%程度多くなりました。この結果から、秋冬まき作型ホウレンソウの‘スパイダー’は有機栽培に適応性が高い有望な品種と考えられます。

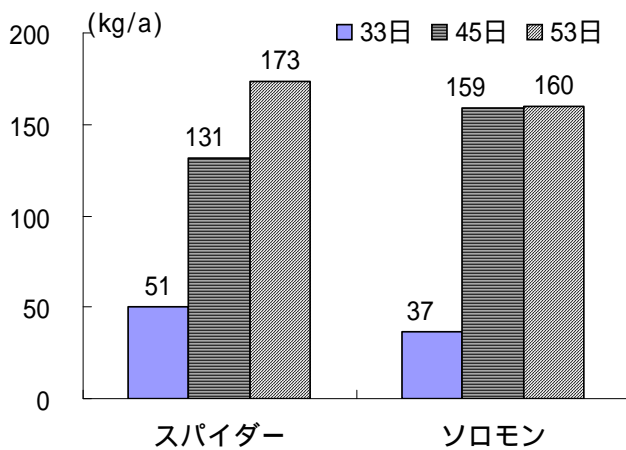


図2 可販収量 (南さつま市)

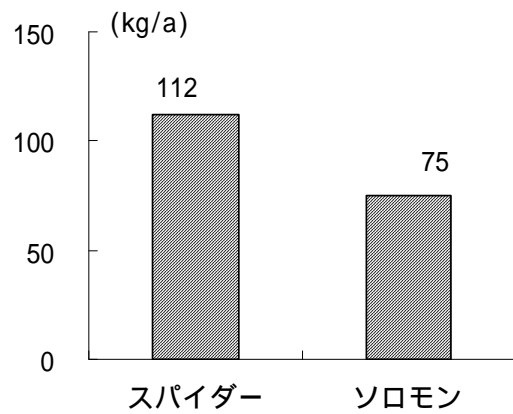


図3 可販収量 (始良市)

可販収量: 草丈25~40cmの株の単位面積当たり重量

は種日 平成23年10月7日
 栽植密度 畦幅150cm 条間20cm 株間6cm
 4条植(4,444株/a)
 施肥量 牛ふん堆肥200, 鶏ふん堆肥50
 (kg/a) 油かす20(窒素量:2.1)

は種日 平成23年11月30日
 栽植密度 畦幅150cm 条間15cm 株間15cm
 5条植(2,222株/a)

「本県有機茶栽培の現状」

1 はじめに

皆さんは「お茶＝緑茶」と聞いてどのようなことをイメージしますか？「安らぎ」「癒し」「苦い」など様々な事が浮かんでくるのではないのでしょうか？アメリカなど海外では、「緑茶は健康飲料」としてのイメージが強いようです。

さて、本県茶生産者は、平成5年から展開中の「クリーンなかごしま茶づくり運動」に賛同し、安全・安心なお茶を国内外に供給しています。中でも無農薬栽培や有機栽培を志向する生産者は年々増加傾向で、経営の一部で試験的な栽培を始めたたり、有機茶研究グループを立ち上げるなどの動きもみられます。

そこで、今回、本県の有機茶栽培の現状について、過去実施したアンケート調査や現在実施中の聞き取り調査の内容を踏まえて紹介します。

2 有機茶栽培の実態

県食の安全推進課によると、現在有機茶栽培農家戸数は57戸、有機栽培面積は221ha(うちJAS有機認証面積190ha)で、これは県内茶園面積の約2.5%にあたります。戸数、面積とも野菜に次ぐものですが、単作目としては一番多くなります。

表1 県内有機栽培の作物別構成 (単位：戸，ha)

区分	水稲	野菜	果樹	茶	計
農家戸数	41	184	22	57	304
有機栽培面積	88	232	27	221	568
有機JAS面積	52	151	11	190	404

食の安全推進課調べ(平成24年3月末現在)

有機茶栽培を始めたきっかけは、「自身の健康被害」、「ビジネスチャンス」や「こだわり」など様々ですが、多くが安全・安心の要求に応えたいというものでした。

3 栽培技術について

病虫害対策は、整せん枝処理や摘採時期の調整などの耕種的防除が中心で、有機資材での防除は少ないようですが、害虫に対して交信攪乱剤や天敵微生物等、病気には銅剤を使用している例もあります。

施肥管理は、堆肥類を含め複数種の資材で対応し、自家製ぼかし肥の使用例もありました。資材の選定理由は、生育・品質面への寄与や入手のしやすさなどを挙げていました。年間の総窒素施肥量は慣行栽培に比べて少なめで基準量(50kg/10a)を下回ることもありました。これは耐病虫性が強くなるとの判断もあるようです。

除草は、有機栽培上一番の課題で人力(刈払機での管理を含む)を基本に対応し、幼木園では敷き草やビニルマルチでの対策を講じています。

4 おわりに

県茶市場での本年有機栽培茶の取扱量は11月末現在52,978kg、平均単価は1,020円/kgで、これは全取扱量のわずか0.31%、単価で89.1%となります。品質重視の取引の中で有機栽培茶の付加価値が反映されにくい状況もあり、生産者の多くは独自の販売ルートを築いています。現在、茶業部では、有機栽培茶生産に活かせる成果が出せるよう収量安定・品質向上に向けた有機関連試験に取り組んでいます。

現地活動の紹介

「オクラのセル苗育苗による早進・増収対策」

(始良・伊佐地域振興局 農政普及課 0995-63-8219)

オクラは夏期栽培の重要品目のひとつで、生産量が増えている品目です。アフリカ原産のため、低温に弱く、霜が降りなくなる時期からの種が一般的です。しかし、このは種時期では収穫開始が遅くなります。トンネル栽培による早進化技術もありますが、資材代もかかるためあまり普及していません。そこで、セルトレイに育苗（以下、セル苗育苗）し、従来のは種期に定植する実証を行いましたので紹介します。

1 実証内容

- (1) 実証区 セル苗育苗 は種：平成23年3月25日（128穴セル1粒まき）
定植：平成23年4月22日（1穴3株定植）
- (2) 対照区 直まき栽培 は種：平成23年4月20日（1穴3粒まき）
- (3) 作式 畦間150cm，2条，株間20cm 6,666穴/10a（3株/穴）
- (4) 調査期間 平成23年7月1日～9月30日（但し，セル苗育苗の収穫は6月下旬から開始）

2 結果・考察

- (1) 実証区（セル苗育苗）の定植苗は本葉展開時としました（写真1）。実証農家によると、定植作業の労力はあまり気にならないとの感想でした。
- (2) 収穫開始は実証区が6月下旬，対照区（直まき）は7月10日で，2週間程度収穫開始が早まりました。収量は実証区が2,637kg/10aで，対照区が2,156kg/10aとなり，実証区が22%の増収となりました（表1）。
- (3) 7月上旬から8月中旬までの実証区と対照区の収量差は22%で，8月下旬以降は収量差がありません。実証区が対照区に比べて増収した要因は収穫開始が早まったためと考えられます（図1）。
- (4) セル苗育苗での早期化対策はハウス育苗となるので，ハウスを持っていない方は育苗委託が必要です。

表1 オクラ出荷量（収量）調査 kg/10a

	6月		7月			8月			9月			計
	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬		
実証区(セル苗)	-	152	376	410	313	335	396	281	250	124	2,637	
対照区(直まき)	-	14	219	331	265	312	379	272	243	122	2,156	
実証区/対照区(%)	-	1117	172	124	118	108	104	103	103	101	122	

注) 6月下旬の調査は未実施

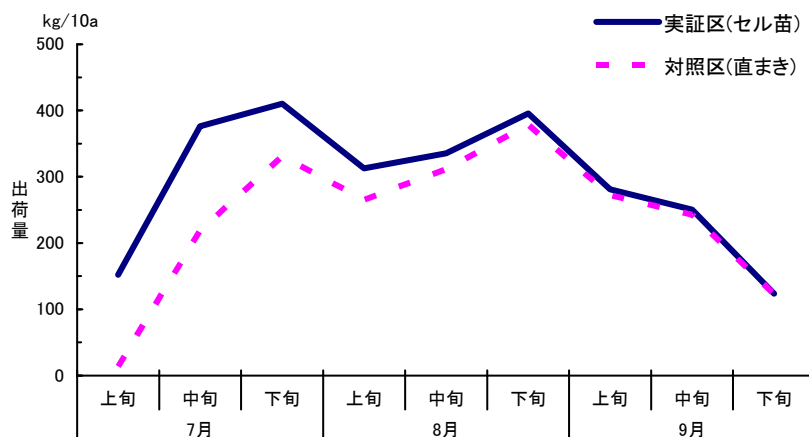


図1 オクラ出荷量(収量)



写真1 定植苗(本葉展開時)